
播種性肉芽腫性病変を呈したニューモシスチス肺炎の一例

阪本 萌永子、松村 佳乃子、大木元 愛子、山岡 貴志、
村上 翔子、岩坪 重彰、中村 美保、伊倉 義弘、船田 泰弘

社会医療法人愛仁会高槻病院

症例は79歳、男性。X年4月上旬より食思不振が出現し、体重が5kg減少した。6月からは喀痰、咳嗽が出現した。その後さらに食事量が減少し、発熱も認めため7月上旬に救急搬送となった。胸部CT検査所見では両肺にびまん性粒状影を認め、経過からも粟粒結核が疑われた。喀痰抗酸菌検査やT-SPOT検査を施行したが陰性であった。肝生検でも肉芽腫性病変は検出されなかった。血液検査で β -Dグルカンが高値(42.9pg/ml)であり、抗真菌薬導入を検討していたが、投与前に呼吸不全で死亡した。死後の病理解剖では両肺びまん性に肉芽腫性病変を認め、*pneumocystis jirovecii*が検出された。ニューモシスチス肺炎(PCP)が肉芽腫性病変を呈することは稀であるが、免疫抑制状態に伴い生じることがある。本症例は著明なるい瘦を認めており、低栄養状態に伴って肉芽腫性病変を呈するPCPをきたしたと考えられた。